

大陸(南支)

第一次上海事変以来

戦争に明け暮れた人生

栃木県 中嶋 武司

私は明治四十一年八月十五日生まれで、生地は日光市ですが、原籍は福井県でした。昭和三年徴集ですが、輜重輸卒が兵隊となり、昭和四年四月一日、輜重兵特務兵として原籍の金沢の輜重兵第九大隊(当時は未だ、工兵も輜重兵も連隊でなく大隊である)へ入隊、五月二十八日兵業終業で除隊したのです。その二カ月間の訓練は輸送業務が主で、駄載(荷物を馬に載せる)、輓馬(馬に車を輓かせる)等に就業、また兵

隊としての基礎訓練も受けましたが、小銃は三八式騎兵銃でした。

私の青壮年期時代は、戦争に明け暮れたと言っても過言ではないでしょう。満州事変後、上海の共同租界には戒嚴令が敷かれ、英・米・仏軍は警備につき、日本の陸戦隊も居留民保護のため上海に上陸して警備をしているという新聞記事も見ていました。それは昭和七年の一月頃でした。

そのうちに、中国の第十九路軍が発砲挑戦をし、閩北一帯は戦闘状態になったといえます。上海には少数の海軍陸戦隊しかおらず、新聞の写真で白いゲートルをつけ市街戦をしている陸戦隊の姿を見て緊迫した気持ちになった記憶があります。

二月四日、突然召集令状を受け取り、原隊の金沢輜

重兵第九大隊第三中隊に入隊、二月十五日上海に上陸、直ちに輸送業務に就いたので。これが第一次上海事変です。私が参加したのは、廟江鎮の爆弾三勇士戦死直後の戦闘でした。

当時の上海派遣軍司令官は、白川義則大将でした。

上海の楊樹甫路に駄馬をつれて一時駐屯して、糧秣、弾薬を第一線に輸送するのにクリーク沿いに行くのですが、クリークの脇で日本兵が負傷して倒れている所を通ります。中国軍の抵抗が強くて、連日の戦闘のため日本軍の犠牲が多く出ました。しかし、特に弾薬が不足していたので、我々は弾薬や糧秣の輸送を任務としていたため負傷兵を助けることも出来なかったのです。負傷兵の後送は間に合わないので、クリークの畔に寝かせてあったわけです。戦争の初めは海軍の上海陸戦隊だけだったのですが、陸軍が救援したわけですから。最初は久留米の師団（第十二師団の混成第二十四旅団）が上陸、続いて我々の金沢の第九師団でした。前線には鉄條網があり、重機関銃を撃ってくるので突入することが出来ません。その鉄條網を切るため、

久留米の工兵が破壊筒（中に火薬を詰める）を持って払腕に爆破しました。その時に自爆して鉄條網を切り開いたのが有名な爆弾三勇士です。廟江鎮のその場所は、竹矢で囲んであり、生々しい戦場でした。

続いて大場鎮へ進むと、塹壕の中で青い軍服に笠を被ったまま、生きているような形で中国兵数人が死んでいました。そういう場所を越えながら前線へ補給物資を輸送したのです。前線では馬は使えないので、塹壕から次の塹壕へと弾薬を持って行きます。その時は、塹壕を出る瞬間瞬間に猛烈に射撃されるのです。我々の仲間は比較的やられませんでした。狙われるのだから弾は近くを飛んでいくのですが、気が張っているため案外当たらないで、むしろ、輸送途中で流れるなどにはやられたものです。

上海近郊は湿地帯なので、輸送には馬は使えず、背負ったり、手で持って運んだりしました。また在留邦人が義勇隊を編成して協力していました。敵は戦闘力のない我々輜重隊を待ち伏せして攻撃してくる時もありました。

夜になると敵は日本軍の夜襲を恐れ、小銃や機関銃をあたかも豆を煎るように撃ってきます。弾が身近にピシピシと来たり、頭の上を通ったりします。まさに雨敵のよう、弾丸雨飛とはこのことと実感しました。砲は迫撃砲が多かったので、畑の中などには不発弾が随分埋まっていました。

我々の第九師団の後に奇襲上陸したのは第十一師団（四国）だったといえます。第二次、第三次と攻撃しましたので、頑強に抵抗していた敵も段々と逃げていき、我々も追撃を止めました。お陰でそこで一息入れることができたわけです。

三月になって停戦命令が出ました。上海付近も大分平静となり、日本軍は遂次内地へ帰還していききました。その時の天長節（四月二十九日）式典の最中に、白川軍司令官、重光公使等が朝鮮人に爆弾を投げられ重傷を負うという事件はありましたが、五月には停戦協定が成立して、全部隊が内地へ帰還することになりました。私も金沢へ帰って、たしか五月二十八日だと思いますが、召集解除となりました。

私たちが二月に出征した時は、勤務していた古河電工では出征兵士を送り出すということは初めてのことです。清瀧神社まで一キロメートルぐらいをプラスチックで華々しく送ってくれました。また金沢で、出征部隊が大通りを行進する時なども盛大なものでした。

当時は日米関係も悪く、日米戦争の予想もあり、新聞や雑誌にも書かれたり、講演会も開かれたりで、出征は盛大に華やかなものでした。また、当然凱旋の時も盛大で華やかでした。

帰ってからは古河電工に復職していたのですが、昭和十六年の春に退職しました。すると、七月には、対ソ戦の準備というか、例の関特演召集が来しました。今度とは前回とは全然違って、ひっそりと秘密で、京都の深草の練兵場で部隊が編成された独立輜重兵第五十八大隊に入隊しました。

八月に、ハルビン郊外、葦子溝（吉林省九台県）に到着しました。下は土を盛ってある蒲鉾型兵舎で貨物廠、兵器廠のある所です。先程も言った、対ソ戦を予

想し、物資や兵器等を集積したもので、貨車も集まり、貨車から荷物を降ろし集積し、それを警備するのと一カ年半でした。

さらに阿城（浜江省）の玉泉（深い井戸で水が奇麗）の警備もしました。満州の一般の水は濁っていましたが、ここは地名のとおり玉泉でした。勤務は貨物、兵器、糧秣廠に昼夜歩哨を出して警備し、同時に積み降ろし作業をしました。

その間に演習もしたり、現地徴集の馬（通称チャン馬、驛馬）の訓練もしました。それは、日本の馬糧はカロリーが高過ぎ馬の体調を崩す（肥え過ぎる）ので訓練をしたわけです。それで、粗食に切り変えるため牧草の栽培もしました。特に馬の手入れは人間より先にやらねばなりません。人間は一錢五厘の葉書で召集出来るが、馬は兵器だとよく言われて、絞られたものです。

内務班では、特務兵の時は進級は遅かったのです。その前の輜重輸卒は人夫同様で、「輜重輸卒が兵隊ならば、蝶々、トンボも鳥のうち」と馬鹿にされています。

した。満州の時は輜重兵になったので一人前の兵隊となりました。そのため我々の仲間の後は支那事変で階級は早く上がったのですが、私は輜重兵特務兵だったので普通除隊の時は一等兵だったのですが、その後は上等兵で除隊となったのです。

ハルビンの次は、昭和十七年二月、新京郊外の孟家屯兵器廠の警備をしましたが、そこにも対ソ戦用の物資が集積されていました。その時は大東亜戦になっていたのですが、私は比較的年配でもあり、新しい兵隊もきたので早く帰ることが出来ました。

残った人達は、南方へ行って死んだり、シベリアへ抑留されましたが、私は幸せにも、昭和十八年十二月二十二日、内地帰還命令により原隊復帰し、釜山經由京都へ帰ることが出来ました。

満州当時は、食糧は米・高粱・粟・大豆などの入った五色米で、割合に美味だったのです。副食も良かったのですが、京都での食事は大分粗末になっていました。しかし、糧秣関係の勤務でしたので、他の部隊より食糧は良いものでした。昭和十九年の元旦は部隊で

迎え、一月二日、京都の第四十部隊で召集解除となりました。

その後、京都から福井の武生へと帰りました。私は老母と二人きりだった（妹は嫁いだ）ので、私が応召中は母を栃木県の喜連川の母の実家に頼んでいました。召集の時は私は東京で一人暮らしでしたので、母も私も互いに心配していました。私は大岡山の工業大学へ復学して勉強しました。卒業と同時に軍需工場へ研究員となっていた関係で、そこへ入社しました。

栃木県磯生まれの妻と結婚し、東京の向島区中川河畔（亀戸と平井の間）の寮に住んでいましたが、昭和二十年三月九日、悪夢のような東京下町の大空襲です。防空壕に入って避難しました。浅草の方から多くの方が平井の方へ避難して来ました。外へ出たら火の粉が飛んでいます。妻と二人でバケツで火を消していましたが、火に巻かれるので吾孀製網の裏（中川ベリ）へ逃れてその晩を過ごしました。途中、中川をボートで逃げた人々のボートが焼けているのを目撃しま

した。翌日見たら周囲は全部焼けてしまっていました。

元の防空壕へ行き中を開けたら、中は大丈夫だったのでその中に三日間いました。まさに、九死に一生を得たのです。上空はB29の轟音が聞こえ、戦場さながらでした。

書籍類は疎開していなかったので皆焼けてしまいました。専門は分析化学、ケミカルですが、高等文官の試験を受けようと独学しました。専検は合格して、高等文官の予備試験も通ったのですが、状況が変わってしまったので、また分析化学の方に進みました。

戦争で青春も破れ、青雲の志も夢となってしまいました。昭五十年まで働きました。今は解放された感じで、やり足りなかったことを何でもやっています。塩原の「湯煙マラソン」は初回から参加しています。鹿沼の「さつきマラソン」、大田原の「与一マラソン」にも毎年出場しています。

戦後の生活を顧みると、配給食料では足りず、不足分は闇ルートで補充をしました。家も工場も焼きつく

されたので、リュックサック一つで妻とともに、喜連川の老母の疎開先へ流れ込みました。

昭和二十五年、西那須野へ転居、今日に至っております。今このように健康でいられるのも、平和のお陰と感謝しております。